白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.20　14 ～ 23（2015）

論文・研究ノート

英語教育における道徳教育－教材論の視点から

Ethic Education in English Education -From the Viewpoint of an Essay on Content of Teaching Materials -

白梅学園短期大学保育科　瀧口　優

Ⅰ．はじめに

2008 年に改訂された現行の小学校及び中学校学習指導要領では，全ての教科及び科目において，道徳の内容について教科の特質に応じて指導することが「指導計画の作成と内容の取り扱い」に組み込まれた。領域としての道徳を各教科の内容に盛り込むことを求めたもので，学習指導要領が指針となって以来はじめてのことであり，道徳の教科化を論議してきた中央教育審議会などの流れからすれば新たな展開である。しかも現在道徳の教科化が進行しており，今後の展開が見えないところもあるが，要するに各教科の教材の内容まで踏み込んで管理しようとする意図が表明されたことになる。既に国語科や社会科においては教材の内容について一定の価値観や評価が持ち込まれ，従軍慰安婦問題や中国や朝鮮半島，あるいは原子力発電所や沖縄の基地の扱い等について，教科書の検定などで問題になってきたことは事実としてある。

一方戦後の英語教育において，学習指導要領では基本的に言語材料（いわゆる文法や語彙）と言語活動（聞く・話す・読む・書く）を柱にして組み立てられ，題材としては形式（文学，説明文，詩，劇，手紙等）が基本となっていて，試案の時代を除くと教材内容については基本的に触れられてこなかったのが実情である。

しかし英語教育の現場では，教材内容について踏み込んだ実践が脈々と続いており，最近ではヨーロッパ発信の学習形態として「内容言語統合型学習」(Content and Language Integrated Learning 以下 CLIL) なども話題となっている。教材内容に踏み込めば一人一人の価値観が問われ，そのことによって当然のことながら物事の価値を判断する道徳教育との接点が出てくることになり，どう対応し，どう指導していくのかを考えなければならない。道徳を全ての教科に持ち込むことは，英語教育において今まで隠れていた教材内容の評価を表面化させることにつながるのである。

Ⅱ．研究目的

教材内容についての先行研究としては，まず「英語科における基礎学力」の中で伴和夫は,「今さらながら，民族性・具体性・即物性・科学性・真実性・芸術性についてあやふやな無国籍者というべきカサカサの英語と教材を生徒に与えてきたと，誰しもドキリと胸を打たれざるをえないだろう」（伴和夫 1965, p.73）として教材論の重要性を展開した。また「中学生の実践」において「詩を欠き，文学を欠き，科学性を欠き，労働を欠き――言にして『生活』を欠いたおもしろくない教科書，これがいまの教科書の姿である」と教科書の教材内容への批判が行われ（林野・大西 1969, p.70），教科書の教材内容の変容に対してその質を問いかけている。更に 1970 年代の教材の自主編成の運動を経て人格形成との関連を取り上げた正慶岩雄は，教科書の創造的な使用の中で教材選択の視点として「よい教材とは」「悪い教材と

は」に触れ,「私たちは学校行事や季節との関連,さらには他の教師との意見の交流を続けつつ,教科書の教材に新たな味付けをしなければならない」(正慶岩雄 1985, p.206) とする。

1990 年に入ると柳沢民雄は「子どもたちに豊かな未来を」の中で平和教育のとらえ方に触れ,「自らの生き方と世界の接点を実感させるための豊富な教材の準備や, 視聴覚教育, 文通の組織化, 外国語を通しての自己を表現させる様々な工夫を通して外国語学習が主体化された時, その力が真に発揮されるのだと思う」と英語教育と平和教育との関連で教材内容と人格形成に触れている (柳沢民雄 1990, p.199)。さらに菊地英は「よい教材とは, 題材内容と表現形式が高いレベルで統一され, 豊かな内容が美しい言葉で表現されているものだ」として教材選択の視点を整理し, 教材内容に関わるものとして「現代の課題に応える総合的な視点」を地球環境問題なども含めて 10 点提示している (菊地英 1992, pp.190-191)。また英語教科書の異文化理解に焦点をあてて分析した江利川春雄は, そのまとめの中で「今日の時代は, いかなる民族のいかなるマイナーな文化と言語であってもこれを尊重し, 対等平等に相手を受け入れることのできる人間, その上で相手に対しても自分たちに対してと同様に建設的な批判のできる人間, こうした人間を育成することを火急の任務として要請している」(江利川春雄 1992 ,p.137) として将来を展望しているが, 教材内容の国際性を重視していると言える。

21 世紀をむかえると英語教育における文学教材に焦点をあててその重要性を指摘したもの (幡山 2005) や障害をもった子どもの教材の実践を紹介する中で人格形成に触れたもの (戸田 2009) などもあり, 多様に展開されている。

一方, 道徳教育と英語教育に関わっての先行研究は, 韓国の国語教育と英語教育について報告した (加藤他 2007) ものや, 日本の道徳教育が英語教育に与える影響をまとめた (達本 1993) もの, あるいは小学校英語活動に関わって人間形成の視点の重要性を取り入れた (山野 2013) もの等があるが, 指導要領との関係で取り上げたものは, 人権活動を基本とした小学校英語活動の展開を紹介した (上萩 2008) ものなどに絞られる。しかも中学校英語と道徳の関係で展開されたものは見当たらない。

本稿では, 学習指導要領において「外国語 (英語)」の中に, 初めて「道徳」が言葉として持ち込まれたことを踏まえて, 英語教育における道徳教育をどのように考え, どのように対応していくのかを明らかにすることである。その視点として「教材内容」に基づいた教材論に焦点をあてた。

Ⅲ. 研究方法

道徳の課題は学校教育全てに関わるものであるが, 本稿では中学校学習指導要領を基本にしながら, 必要に応じて高等学校や小学校の学習指導要領にも触れることを基本として展開していく。

その上で, 第一に過去の学習指導要領を分析しながら, 道徳教育や外国語 (英語) 教育がどのように位置づけられてきたのか, その経緯をたどる。第二として, 中学校における外国語 (英語) における教材内容がどのように取り上げられてきたのかに触れる。学習指導要領の記述はもちろんであるが, 教科書の内容についても触れる。第三として, 過去の外国語教育において, いったいどの程度の「道徳教育」の内容が意識されてきたのか, 中学校の実践を参考にしながら整理する。

Ⅳ. 研究結果

1. 中学校学習指導要領における道徳教育と外国語教育の位置づけ

中学校学習指導要領に道徳が登場したのは 1958 年の改訂である。総則第 1 章第 3 節において,「学校における道徳教育は, 本来, 学校の教育活動全体を通じて行うことを基本とする。した

がって，道徳の時間はもちろん，各教科，特別教育活動および学校行事等学校教育のあらゆる機会に，道徳性を高める指導が行われなければならない。」（文部省 1958）とし，目標として「人間尊重の精神を一貫して失わず，この精神を，家庭，学校その他各自がその一員であるそれぞれの社会の具体的な生活の中に生かし，個性豊かな文化の創造，民主的な国家および社会の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる日本人を育成することを目標とする。」とした。一方，中学校外国語の中では目標として，「①外国語の音声に慣れさせ，聞く能力および話す能力の基礎を養う，②外国語の基本的な語法に慣れさせ，読む能力および書く能力の基礎を養う，③外国語を通して，その外国語を日常使用している国民の日常生活，風俗習慣，ものの見方などについて基礎的な理解を得させる」として，道徳や教材内容の問題を取り上げる記述にはなっていない。

1969 年「道徳」の改訂では「道徳教育は，人間尊重の精神を家庭，学校，その他社会における具体的な生活の中に生かし，個性豊かな文化の創造と民主的な社会および国家の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる日本人を育成するため，その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。」としてほぼ前回の目標をそのまま受け継いでいる。外国語の目標は「外国語を理解し表現する能力の基礎を養い，言語に対する意識を深めるとともに，国際理解の基礎をつちかう。」として前回の記述から「風俗習慣」が消えて「国際理解の基礎を培う」ことが書き込まれる。

1978 年「道徳」の改訂では「人間尊重の精神と生命に対する畏〔い〕敬の念を家庭，学校，その他社会における具体的な生活の中に生かし，個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成するため，その基盤としての道徳性を養うこととする。」として「生命に対する畏敬の念」が目標に持ち込まれた。外国語の目標は「外国語を理解し，外国語で表現する基礎的な能力を養い，外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに，言語や文化に対する関心を深め，国際理解の基礎を培う。」となり，はじめて「コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが強調される。

1989 年「道徳」の改訂では 1978 年改訂と全く同じ文面となっている。また，外国語においても前回と同じ文面である。ただし前回までは「内容の扱い」として文法の取扱いについてだけ触れていたものが，「指導計画の作成と内容の取扱い」となって，辞書の使い方やネィティブ･スピーカーの協力に触れるなどと合わせて以下のような教材への観点を提示している（文部省 1989,p.130）。

ア．広い視野から国際理解を深め，国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに，国際協調の精神を養うのに役立つこと。
イ．言語や文化に対する関心を高め，これらを尊重する態度を育てるとともに，豊かな心情を育てるのに役立つこと。
ウ．世界や我が国の生活や文化についての理解を深め，国際的な視野を広げ，公正な判断力を養うのに役立つこと。

1998 年の「道徳」の改訂では，今までの「個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成」という表現が消え，「道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度などの道徳性を養う」となって個人の心の問題に焦点が絞られる。外国語では「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」として「国際理解の基礎を培う」が消えて「実践的コミュニケーション」が強調される。なお，1989 年の改訂で「指導計画の作成と内容の取扱い」で加えられた教材への観点

では，「多様なものの見方や考え方を理解し」が加えられている。

2008年の「道徳」の改訂では1998年の改訂をそのまま取り上げている。一方外国語では「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」となり「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を培う」から「聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」となって，外国語を読むことや書くことに重点が置かれるようになった。合わせて指導計画の作成と内容の取扱いにおいて教材の観点として前回の改訂に，「伝統文化や自然科学」が加えられ，道徳教育に関わって「外国語科の特質に応じて適切な指導を行うこと」が導入された。

学習指導要領の改訂経過を目標中心に振り返ってみると，道徳においては社会への視点から意欲や態度へという「内向き」なこころの問題に焦点があてられてきたのに対して，外国語においては国際理解などの視点からコミュニケーション能力などの技術的なところに視点があてられてきている。つまり外国語は技術であり「聞くこと，話すこと，読むこと，書くこと」などの技術を向上させることが目的で，教材内容に踏み込んで道徳的な価値を学ぶものではなかったことを示している。

2．検定教科書の教材と授業における教材内容の扱い

1節において学習指導要領の目標の変遷を中心にまとめたが，実際に検定教科書の教材はどのように取り上げられてきているのだろうか。

教材内容の視点から最初に議論されたのは日教組教育研究集会（以下「日教組教研」）第8次集会（1958年）の外国語教育分科会であり，そのまとめで五十嵐新次郎は「もう黙ってはいられない。さきほどから，非常に細かい指導上の技術が論議されているが，英語が『真実をつらぬき平和を守る』教育とどういう関連を持っているかを，まず明らかにすべきである」という傍聴者の発言を紹介しながら次のようにまとめている。

現在の中学校における外国語科英語の指導には，改訂学習指導要領に掲げられている技能目標以前の問題がある。それは，国民教育における外国語科（英語）の在り方，別言すれば国民教育における外国語科（英語）の教育的価値は何かということである。このことを，一度，はっきりさせておかないと，教科目標にせよ，技能目標にせよ，それによって組み立てられる教育課程にせよ，教材にせよ，指導法にせよ，評価方法にせよ，みなぐらつき出してしまうし，第一担当者が熱意をもって指導にあたることができず，むしろことばは過ぎるかもしれないが，進学とか，学力テストとか，教育的に必ずしも純粋でないものに引きずられて指導するか，あるいは，ただ教科書をお座なりに，（お座なりと言って悪ければ）几帳面に教えて万事終われりとしてしまうことになりかねない。（五十嵐 1958）

以後教育研究集会では，「人間形成としての英語教育」（五十嵐新次郎 1959, p.47），「現行教科書にあるものには思想がまったくない，題材が面白ければ英語にも興味を持つ」（五十嵐新次郎 1960），「教科書には一方的に押しつけ的な内容のものが多い，われわれはこの種のものを排除して，足りない面を自主的に教材を補充して行くべきだとの見解」等，教材内容についての批判が展開されている。白人の保護と援助のもとに科学者として成功したという黒人少年の話では，白人の善意が強調され，黒人問題に対する視点が出ていない，という高知からの報告を紹介している（高橋文雄 1962）。

1967年になると，改訂された中学校の教科

書の教材が道徳的な色彩が強くなったとして，George Washington Carver に見られる内容の変更を紹介している。旧版にあった「But he could not enter a certain college because he was colored. “Here is a problem that I have to solve” he said to himself.」（しかし彼はある大学に黒人だからという理由で入学できなかった。「この問題を解決しなければならない」と自分に言い聞かせた。）が削られ，「God helps those who help themselves.」（神は自らを助けるものを助ける）という格言に変えてしまったことを取り上げている（小野協一 1967）。

1968 年にはこうした教科書の教材内容についてまとまった形での批判が取り上げられるようになり，「教科課程自主編成の視点」（林野滋樹・大西克彦 1968, p.79）が提示される。

①生徒を生活の主体者としてとらえ，その生活に根ざしたもの
②労働と科学（自然科学，社会科学とも）を基礎に据えた真実性・集団性に立ったもの
③芸術的真実にみちた香り高いもの
④民族的課題（完全独立, 平和と民主主義など）をしっかりと踏まえたもの
⑤基本的人権を重んじる立場に立って，諸国人民との国際的連帯性を目ざしたもの

中学校英語教育の現場では，上記の視点を踏まえて，教科書教材の活用，教科書を批判的にあつかった実践，あるいは改作，そして自主製作教材による実践が展開される。広島では自主平和教材として「Let's Cry for Peace」(1970) が作られる。さらには多数の教師の協力によって中学校用の自主編成英語教科書として「ENGLISH FOR TOMORROW」の中学校編（1972 三友社）として 3 冊が作られる。

1970 年代には現場からの教科書批判，とりわけ教材内容への批判を受けて，教科書会社が各地の研究会や学会に参加し，どのような教材が求められているか模索しながら，現場教師の反応を確かめていた。検定教科書の編集委員として中学校の英語教員が参加したり，検定に提出する白表紙本ができると現場の教員に意見を求めるようになったのはこの時期からである。異文化理解という視点から戦後の中学校教科書を分析した江利川は，1972 年から 74 年度の教科書を総じて，「非英語圏では，値は小さいながら 4 項目すべてにアフリカが登場しているが，アジアは国名地名以外にはいかなる教科書にも全く登場していない」（江利川 1992）として，アジア軽視の問題を指摘しつつ，アメリカ一辺倒だった 1960 年代から変化しつつある教科書を取り上げている。

また教科書以外の自主教材として英詩や歌が取り上げられるようになり，A Child’s Wish に取り組んだ実践（清水建男 1974, pp.15-17），水俣病問題をテーマにした We Can Stand の実践（茂木 1977）あるいはフォークソングを使って平和問題を取りあげた実践（上村敦 1970）などがある。戦時中の上野動物園の象の話を題材にした絵本「かわいそうなぞう」（金の星社 1970）が英語教材「The Poor Elephants」としてこの時期に取り上げられ, 平和をめぐる心の問題に触れている。

1980 年代に入ると，中学校現場からの批判を受けて検定教科書に人権や平和，環境問題などをテーマとした英文が取り上げられるようになり，中学校検定教科書 New Crown（三省堂）の 2 年生用に使われている Martin Luther King 牧師の”I Have a Dream”を改作して生徒に提示した実践（本多行一 , 1988, pp.57-72），New Prince English Course Book 2(開隆堂) の ”A Woman Photographer” を補助資料をもとにして取り組んだ実践（江口元夫 1988, pp.73-85），あるいは New Horizon 2（東京書籍）の”Why Are There No Fish?”を書きかえて環境問題の読み取りに取り組んだ実践（井上敬典 1988, pp.86-98）等に象徴される。自主教材あるいは補助教材としては”The Diary of Anne Frank”（斉藤政子 1981），ガンジーの息子への手紙を扱った“Gandhi’s Letter to His Son”の実践（米澤清恵 1985）などがあり，中学校において人権や平和をテーマ

とした英語の授業が豊かに展開されている。前述の江利川は80年代の中学校教科書の教材について,「データではアメリカの値がさらに低下する半面で，日本の値が著しく上昇している」と分析し，教材内容がアメリカ一辺倒から「国際化」していることを提示している（江利川 1993, pp.121-122）。

1990年代になると中学校や高等学校の英語の授業に外国人講師が導入され，海外との交流を視野に入れた英語の授業が展開され，修学旅行で出会った外国人から平和のメッセージを書いてもらい，それを授業で読み取ることを通じて英和や国際連帯を考える実践が広く行われるようになった（赤坂 1990，大塚 1991）。中学校の教科書という点では，New Crownの3課に登場した“The Rain Forest”の教材をもとにして5人の班で新聞の切り抜きなどを持ち寄り，新聞づくりを行わせた実践（原藤 1996），Everyday Englishに取り上げられた第二次世界大戦中の日系アメリカ人の実話体験を取り上げた実践（神薗 1995）等，教科書教材を豊かに発展させる授業が行われている。

21世紀をむかえて，2002年から使用の教科書についての分析によれば，指導要領に実践的コミュニケーションが書き込まれたのを受けて,「全体的に練習問題，アクティビティ量が大幅に増えた。教科書によっては，本文より分量が多く，本文以上に授業時間がかかりそうだ」（新英語教育編集部 2001, p.8）としながら「どの教科書も様々な視点から選んで良い教材を載せている。ただし，言語材料の制限，ページ数の制限等で深められないのが残念である」（同）と結びつつ，印象に残った教材として，1年生としては「Let's Save the Earth」「New Year's Food」等，2年生としては「Mother Teresa」「For a World without Landmines」「Regoberta Menchu」，3年生として「The Fall of Freddie the Leaf（葉っぱのフレディ）」「Without Barriers（ユニバーサルデザイン）」「A Japanese Volunteer in Cambodia」等，豊かな内容の教材が取り上げられているとまとめている（新英語教育編集部 2001, p.9-15）

Ⅴ．考察とまとめ

1．研究結果から見えてきたこと

（1）学習指導要領の英語では道徳性が問われる教材内容について触れてこなかったこと

学習指導要領の外国語（英語）の内容が「言語活動」「言語活動の取扱い」「言語材料」となっており，教材内容については触れていないことによって，教科書出版社や教員が自らの判断で教材内容を作ってきたということである。その結果が多様な教材を盛り込んだ教科書作りや授業実践につながってきたとも言える。

一方，Ⅳで示した様に，1960年代初めから英語教育の現場では豊かな教材内容が検討され，交流を通して全国に広まっていき，それが1970年代から1980年代以降の教科書の内容を変えるような働きとなったということである。

（2）実際の現場では，道徳性に関わる教材内容を重視した実践が様々行われてきたこと

1950年代末から1960年代にかけて教材内容についての論議が重ねられ，言語活動や言語材料と併行して教材発掘や教材作成が進み，それが授業の中に組み込まれてきたということである。新しい指導要領において道徳目標にあった「個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め，進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育成」という表現が消えて「道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度などの道徳性を養う」となっても，教材内容の大きな流れを変えるところまでは達していないということである。

平和の教材や環境問題を扱っている時に，それは社会科で取り組むことではないかという批判が，英語科内部はもちろん，他の教科から指摘さ

れることがある。しかし教師の教材内容への「思い」があってこそ生徒に対して伝えることができるという事実があったのであろう。

（3）「英語科における道徳教育」については未整理の状態である

2008年度学習指導要領の外国語第3章「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で，「第3章道徳の第2に示す内容について，外国語科の特質に応じて適切な指導をすること」となっているが，指導要領の解説では現行教科書の教材内容について新しい視点を提示するところまでは届いていない。したがって英語科における道徳教育の内容については整理されたものがないというのが実状であろう。

ただし第2章「外国語科の目標及び内容」の第3節において，教材選定の観点として以下の3点を取り上げており，教材内容についての視点は掲げていると考えられる。

ア．多様なものの見方や考え方を理解し，公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ．外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに，言語や文化に対する関心を高め，これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ．広い視野から国際理解を深め，国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに，国際協調の精神を養うのに役立つこと。

2．「教科の道徳化」「道徳の教科化」にどのように対応していくか

現行の指導要領で初めて書き込まれた各教科での道徳への取組は，今後英語教育にももっと具体化することが予想される。そもそも道徳というものは人間の在り方や生き方に関わるものであり，知識として学んでいくものではない。今後教育現場としてどのように取り組んでいったらよいのだろうか。その視点を取り上げておきたい。

（1）内容項目の観点と教材論の視点を重ねる

教科の道徳化を考える上では，どのような教材内容が求められているかという教材論をおさえなければならない。領域としての「道徳」においては，第2節に内容項目の指導の観点として以下の4つのジャンルを示しており（文部科学省2008），これらが教材内容に関わってくるであろう。

＜1．主として自分自身に関すること＞

①望ましい生活習慣を身に付け，心身の健康の増進を図り，節度を守り，節制に心掛け調和のある生活をする。

②より高い目標を目指し，希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。

③自律の精神を重んじ，自主的に考え，誠実に実行してその結果に責任をもつ。

④真理を愛し，真実を求め，理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。

⑤自己を見つめ，自己の向上を図るとともに，個性を伸ばして充実した生き方を追及する。

＜2．主として他の人とのかかわりに関すること＞

①礼儀の意義を理解し，時と場に応じた適切な言動をとる。

②暖かい人間愛の精神を深め，他の人々に対し思いやりの心をもつ。

③友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち，互いに励まし合い，高め合う。

④男女は，互いに異性についての正しい理解を深め，相手の人格を尊重する。

⑤それぞれの個性や立場を尊重し，いろいろなものの見方や考え方があることを理解して，寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ。

⑥多くの人々の善意や支えにより，日々の生活や現在の自分があることに感謝し，それにこたえる。

＜3．主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること＞

①生命の尊さを理解し，かけがえのない自他の生命を尊重する。

②自然を愛護し，美しいものに感動する豊かな心をもち，人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
③人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて，人間として生きることに喜びを見いだすように努める。
＜4．主として集団や社会とのかかわりに関すること＞
①法や決まりの意義を理解し，遵守するとともに，自他の権利を重んじ義務を確実に果たして，社会の秩序と規律を高めるように努める。
②公徳心及び社会連帯の自覚を高め，より良い社会の実現に努める。
③正義を重んじ，だれに対しても公正，公平にし，差別や偏見のない社会に実現に努める。
④自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め，役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
⑤勤労の尊さや意義を理解し，奉仕の精神をもって，公共の福祉と社会の発展に努める。
⑥父母，祖父母に敬愛の念を深め，家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
⑦学級や学校の一員としての自覚をもち，教師や学校の人々に敬愛の念を深め，協力してよりよい校風を樹立する。
⑧地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し，社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め，郷土の発展に努める。
⑨日本人としての自覚を持って国を愛し，国家の発展に努めるとともに，優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
⑩世界の中の日本人としての自覚をもち，国際的視野に立って，世界の平和と人類の幸福に貢献する。（下線は瀧口）

一方，今までの学習指導要領が教材内容について触れてこなかったことによって英語科教育法の入門書などには「教材」や「教材研究」に触れるものは少ない。触れているものでも技能別，用途別，メディア別，機能別などの種類別に分けている（望月他 2010）ものはあるが，題材の内容を分類しているものはないと言える。Ⅳの２で取り上げた「教科課程自主編成の視点」もその一つであるが，大まかすぎて多くの教材を分類するには限界がある。

長谷川清は英語教育をどう構想するかの中で，英語科の教科内容を「メカニズムと発想」，「英語による自己表現」と並べて「文化的価値」を指摘した（長谷川 1988）。この文化的価値は言い換えると教材の持つ文化性であり教材論ともいえるものである。それをふまえて「すぐれた教材とは」の視点で戸田康は以下のようにまとめている（戸田康 2009，pp63-64）。

①人類の課題に応える教材
戦争と平和，核廃絶，差別撤廃，環境保護，人権擁護，多文化共生，国際連帯など，人類が直面してきた課題，21 世紀の世界を考える課題を取り上げたもの。
②「現代」を考える教材
人間，社会，障害者，民主主義，貧困，労働など，現代社会の課題を取り上げたもの。
③今を生きる青年の課題を取り上げた教材
青春，家族，恋，葛藤，生き方，友情，連帯など青年が直面する課題を取り上げたもの。様々な生き方を知る。
④人類の文化遺産に関わる教材
文学，詩，歴史，文化，芸術の素晴らしさに触れるもの
⑤新しい発見のある教材
世界・視野を広げる，世界を知る，科学や自然の驚異，ことばの豊かさなど

道徳の指導の観点において下線を引いた部分は上記の戸田の提示部分と表現は違っているが重なった部分がある。項目で合わせれば以下の通りである。
＜1．主として自分自身に関すること＞⇔③今を生きる青年の課題を取り上げた教材
＜2．主として他の人とのかかわりに関すること＞⇔②「現代」を考える教材

＜３．主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること＞⇔⑤新しい発見のある教材
＜４．主として集団や社会とのかかわりに関すること＞⇔①人類の課題に応える教材

（２）教材内容の視点を柱にした英語科における道徳へのアプローチ

以上を踏まえて「教科の道徳化」「道徳の教科化」が進む中で，1960 年代から進められてきた教材内容の視点にこだわった授業として積み上げてきたものが生かせるのではないかと考える。つまり共通する観点を重視して取り組むことが可能なのではないだろうか。

今後教科書の検定等を通じて，内容項目の４つの指導の観点が英語の授業に持ち込まれ，個人の態度が強調されることが予想される中で，過去 50 年以上にわたって教材内容の視点を重視して教材選択や授業実践，そして高校においては教材内容を重視して各学校が教科書採択を行ってきた経緯を踏まえて，英語の授業の創造的な取り組みをすすめることが必要になってくるのではないだろうか。

おわりに

かつてデューイは「社会生活に有効に参加する能力を発達させるすべての教育は道徳的である」（デューイ 1975,p.246）と書いた。学習指導要領を通じてすべての教科に道徳を持ち込み，「社会生活に有効に参加する能力を発達」させるとすれば道徳は有効に作用するであろう。しかし指導要領では「学習活動や学習態度への配慮，教師の態度や行動による感化」となっていて，子どもたちが社会や世界に関心を持ち，自ら外に出ていくという方向にはなっていない。確かに「態度」は重要であるが，子どもたちの態度を生み出すのは教材に対する確信と教師の指導性への信頼である。

「２．検定教科書の教材と授業における教材内容の扱い」で触れたように，英語教育においては 50 年にわたって積み上げてきた教材内容への視点と教材論があり，学習指導要領の道徳において提示された４つの「指導の観点」に十分対応するものである。むしろ子どもたちを取り巻く社会や世界に対して，有効に参加する能力を発達させることが可能な視点とも言える。長谷川清の提起した「文化的価値」の視点から言えば，教師が「文化的価値」を見抜く力を高めることによって実践的に克服されていくのであろう。

より根本的には，何のための外国語教育であり，何のための道徳教育なのかがはっきりしていなければならない。外国語教育については，教育研究集会を通じて確立してきた「外国語教育の四目的」（大浦暁生・内野信幸，2001）があり，その目的に沿った教材論がある。「外国語の学習を通して, 世界平和, 民族共生, 民主主義, 人権擁護, 環境保護のために，世界の人々との理解，交流，連帯を進める」（第１目的）はその基本でもある。

＜外国語教育の四目的＞

１．外国語の学習をとおして，世界平和，民族共生，民主主義，人権擁護，環境保護のために，世界の人びととの理解，交流，連帯を進める。

２．労働と生活を基礎として，外国語の学習で養うことができる思考や感性を育てる。

３．外国語と日本語とを比較して，日本語への認識を深める。

４．以上をふまえながら，外国語を使う能力の基礎を養う。

現在導入が予定されている道徳教育は，提示された「指導の観点」からは個人の心の問題に矮小化される懸念がある。英語教育の分野では，「社会や世界に有効に参加する能力」をめざし，今後も多様な教材を取り上げていくことが子どもたちの豊かな人格形成に求められるであろう。

＜引用文献一覧＞

・赤坂正志 1990 Peace Message から Peace Questionnaire へ 新英語教育 252 号 三友社出版
・五十嵐新次郎 1958 第二分科会外国語教育 日本

の教育８ 国土社
・五十嵐新次郎 1959 第二分科会外国語教育 日本の教育９ 国土社
・五十嵐新次郎 1960 第二分科会外国語教育 日本の教育 10 国土社
・井上敬典 1988 Why Are There No Fish? を書きかえて（1）新英語教育講座 11 巻 三友社出版
・江口元夫 1988 A Woman Photographer －女性の生き方を学ぶ教材と読み取り（1）新英語教育講座
11 巻 三友社出版
・江利川春雄 1992 戦後の英語教科書に見る異文化理解の変遷 日本英語教育史研究７巻
・大浦暁生・内野信幸 2001 新四目的成立の意義と展望 新英語教育 382 三友社出版
・大塚深雪 1991 “加害”にこだわったピースメッセージ 新英語教育 264 号　三友社出版
・小野協一 1967 第二分科会外国語教育 日本の教育 16 日本教職員組合
・神薗幸子 1995 教科書の創造的取扱い 新英語教育 310 号 三友社出版
・上萩琴美 2008 道徳・人権教育を中核とした英語活動 小学校英語教育学会紀要９号
・上村敦 1970 Folk Song を授業に取り入れて 新英語教育 54 三友社
・菊地英 1992 生き方にせまる教材と授業づくり 生徒の心を豊にする 三友社出版
・斉藤政子 1981 中学３年の実践－「アンネの日記」新英語教育 138 号 三友社出版
・笹島茂 2013 CLIL はおもしろい－背景とその可能性 英語教育第 62 巻３号 大修館書店
・清水建男 1974 生徒を生き生きさせる教材－英詩の解釈について－新英語教育 77 号 三友社
・正慶岩雄 1985 意欲をはぐくむ中学英語の授業 三友社出版
・新英語教育編集部 2001 新中学教科書の特徴 新英語教育 383 号 三友社出版
・高橋文雄 1962 第二分科会外国語教育 日本の教育 12 国土社
・瀧口優 2003「苦手」を「好き」に変える英語授業 大修館書店
・達本美香 1993 日本における道徳教育の影響－日米の教育比較及び英語教育に与える影響－手塚山大学教養学部紀要 34 号
・デューイ、ジョン（松野安雄）1975 民主主義と教育（下）岩波書店
・戸田康 2009 世界を広げ，生き方を考える教材を 新しい英語教育の創造 三友社出版
・長谷川清 1988 英語教育で何を教えるか 高文研
・林野滋樹・大西克彦 1968 第Ⅱ章 中学校の実践 新しい英語教育の研究 三友社出版
・原藤明子 1996 環境問題に関する新聞づくり 新英語教育 324 号 三友社出版
・幡山秀明 2005 英語教育と文学的教材 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 28 号
・伴和夫 1965 英語教育とは何か 英語教育の理論 三友社出版
・本多行一 1988　I Have a Dream －未来に夢を教材と読み取り（1）新英語教育講座 11 巻 三友社
出版
・望月昭彦編 2010 英語科教育法 大修館書店
・文部省 1958 中学校学習指導要領
・文部省 1969 中学校学習指導要領
・文部省 1978 中学校学習指導要領
・文部省 1989 中学校学習指導要領
・文部科学省 1998 中学校学習指導要領
・文部科学省 2008 中学校学習指導要領
・柳沢民雄 1990 子どもたちに豊かな未来を
グローバルな心を育てる 三友社出版
・山野有紀 2013 小学校外国語活動と CLIL 英語教育 62 巻第３号 大修館書店
・米澤清恵 1985 生徒を励ます教材を求めて 新英語教育 194 号 三友社出版